

【第26回大会・企画趣旨】

## 現代日本の教育をどう見るか

—— 英国人たちの視点 ——

上田 学

(千里金蘭大学)

周知のように英国では、1980年代から教育改革が進行していった。その範囲と規模は我々の予測をはるかに超えたものであり、何がどの程度変わり、現在どのようになっているのかを、逐一後追いすることは大きな困難を伴うものであり、したがって英国の教育に関する最新情報を入手することには一定の価値があったことはいまでもなかった。

しかしその一方で、日本においても20世紀末から徐々に教育改革が進展していったことも事実である。規制緩和、地方分権、学校の自主性・自律性、地元根付いた教育などはこの動向を示すキーワードであった。このような動向のなかで新たな試みもみられるようになった反面、相も変らぬ教育界の風土や実態もまた否定できないであろう。

このような我々の足場となる日本の教育の動向を踏まえながら、外国研究（英国の教育研究）を進めていかなければならないが、我々が所与のものと考え、常識として受け止めている日本の教育が、英国を基盤として教育を受けてきた人々にはどのように映っているのであろうか。また日本の教育の現状がどのように受け止められ、場合によっては我々のそれとは異なる見方があるのではないかと考えられる。

日本の教育についての捉え方やその特徴などを、われわれとは異なる視点から提示してもらい、彼我の違いが発生する背景や考え方を検討しながら、今後の英国教育の深化に寄与できる論点や特徴を理解しようとするのが今回のシンポジウムのテーマの目的であり、趣旨である。

### シンポジスト紹介

マーク・シェフナー 〈Marc Sheffner〉氏 (帝塚山大学人文学部)

オックスフォード大学を終えてから、日本に赴任。英語教育・異文化間コミュニケーションを中心に研究・教育活動を展開している。主な業績として *Using TIES and a blog for an English Writing Class: an experiment using different Learning Management System* (2008)。のほか、*The Not Doing* (Itsuo Tsuda, *Le Non-Faire*, 1984)。の翻訳も手がけた。

ロバート・アスピノール 〈Robert Aspinall〉会員 (同志社大学グローバル教育センター)

英国のマンチェスター出身で、オックスフォード大学で政治学の博士号、日本と英国における教育学・政治に関心をもって研究を進めている。現在、日本と英国の中等教育の比較研究に従事している

アール・キンモンズ 〈Earl Kinmonth〉氏 (大正大学名誉教授)

米国ウィスコンシン州立大学を卒業、シェフィールド大学で日本史の講義を担当するなど、主に近代日本の思想史と社会史、英国、米国、日本で技術移転と技術実用化における技術者の役割を研究している。『立身出世の社会史——サムライからサラリーマンへ』(玉川大学出版部、1995年)、*The Self-Made Man in Meiji Japanese Thought: From Samurai to Salaryman* (University of California Press, 1981)。などの著書がある。